

科学技術と宗教

『現代宗教 2019』編集委員会

21世紀に入って、新たな科学技術、とりわけ情報工学や生命科学の進展が目ざましい。新たな科学技術が人間生活のあり方を大きく変えていくような事態が生じるのではないかと考えられるようになってきた。それについて述べる前に、近代の「科学技術と宗教」の概略を歴史的に展望しておこう。

科学の発展が世界観を変えてしまうような事態は、必ずしも新しいことではない。17世紀にはニュートンらによる科学革命が起こり、地動説が支配的になり、それまでの天体と大地と人間の関係についての宗教的世界観は受け入れられなくなっていった。19世紀にはダーウインの進化論が提示され、神が人間を中心とする生物界を創造したという宗教的世界観は後退していった。19世紀後半は医学の発展が目ざましく、感染症を制御するなどの大きな成果を上げた。

20世紀を通じて、科学技術の進歩は著しいものがあり、人間の福祉は大いに増進した。人類の平均寿命は大きく延び、富と行動力は増大し、知的文化的な達成は飛躍的に向上し、宇宙を飛んで天体に降り立つことまでできるようになった。ところが、20世紀には科学技術が人類社会に脅威をもたらす可能性についても自覚せざるをえない事態を生み出した。核（原子力）の利用は人類の絶滅や将来世代への膨大な負荷の可能性を、環境問題の認識は人類の生存基盤の掘り崩しを危惧させるまでになった。

さらに、20世紀の最後の4半世紀に姿を現し21世紀の前半に急速に発展をとげている新たな科学技術は、今後、人類社会にどのような変化をもたらすか、まだとても見極めがつかない状況だ。たとえばAI(人工知能)の発展はさまざまな側面で人間の知能を追い抜くことが予想されたり、また人間の知的労働のあり方を変えてしまうのではないかと予想されたりする。人は労働時間を減らして、文化的創造や遊びにもっと多くの時間を振り向けることができるようになるのだろうか。それとも人間がAIを制御できずに、むしろAIに従属するような事態になることはないのだろうか。

万能細胞やゲノム編集や合成生物学の発展は、農作物や畜産物、また漁獲物を大きく増大させ、人類の食生活を豊かにし、微生物の利用を含め、生物のその他の利用可能性も飛躍的に広げていく可能性がある。だが、それは生態系を大きく改変し、地球上の限りないほどに多様な生命の共存の条件を掘り崩す危うさはないだろうか。

また、受精卵(胚)や生殖細胞など、ヒトの発生の初期の段階への介入は、多くの難病の治療を可能にし、健康と長寿を飛躍的に増進させることができるかもしれない。だが、人類の身体や脳を思うままに改変していくことが進めば、人類という種の一部が別の生命体へと変わっていく可能性もある。それは人類が共有してきた相互尊重の規範や人の生命の尊さの感覚を弱めてしまうかもしれない。それは、差別・排除を越えようとしてきた人類の努力を逆向きに転換させてしまう可能性があるかもしれない。

こうした大きな可能性と危うさをともにはらんだ新たな科学技術の発展は、宗教のあり方とどう関わるのだろうか。科学と宗教の関係をどのように変えていくのだろうか。科学技術を組み込んだ新たな宗教性のあり方が現出してくるのだろうか。新たな科学技術を用いることによって、宗教は新たな様相を帯びることになるのだろうか。また、宗教は科学技術の進展を倫理的に制御することに貢献できるのだろうか。

本特集では、現代の新たな科学技術の目ざましい発展が、今後、人類社会のあり方に大きな変化をもたらすかもしれない、また、宗教のあり

方にも同じように大きな影響を及ぼすかもしれないという展望のもと、過去・現在・未来の「科学技術と宗教」について、さまざまな問いをもって切り込み、さまざまな角度から理解を深めていきたい。

(文責：島菌 進)